

小学校英語の絵本の読みあいにおける「場」の生成について ——熟達者の読み手の技術としての「場」の生成力——

松本由美

On Creating 'Ba' for Picture Book Reading in English Classes at Japanese Elementary Schools: Ability of Creating 'Ba' as a Strategy of Proficient Reading of Picture Books

Yumi Matsumoto

Tamagawa University Research Institute, Machida-shi, Tokyo, 194-8610 Japan.
Tamagawa University Research Review, 26, 33-42 (2020)

要 約

本研究は、小学校英語における英語絵本の教育的読み手の育成に必要な、熟達者の技術を取り出し、明文化することを目的とした。そこで①プロの読み手であり教育者でもある熟達者Aの読み聞かせを動画で記録し、後日この動画を見ながらAにインタビューを行い、意図的、非意図的に行った読み聞かせの技術を炙り出し、ここから熟達化に必要な技術項目を措定した。次に先の項目において①熟達者A ②みなし熟達者（絵本読み経験2年以上）の大学生C1C2 ③非熟達者（成功：現場初経験で読み聞かせに成功した）D1D2, ④非熟達者（成功しなかった：現場初経験で読み聞かせに成功しなかった）E1E2の4者の読み聞かせ動画を比較検討し、熟達者と非熟達者を分けるもの、さらに成功者と非成功者を分けるものを抽出し、教育的読み聞かせにおいて熟達化の必要項目と、熟達していなくても成功するために優先度の高い項目の解明を試みた。結果、多くの先行研究で取り上げられている絵本の物語世界を声や表情や仕草などを使い表現する演技手としての表現技術の他に、教育現場における読み手（教育的読み手）として優れるためには、絵本を媒介し、読み手と聞き手が、物語の世界観を共有し共感する（本稿の述べる）「場」を生成し、コントロールする技術が必要不可欠であることが分かった。

Abstract

This research has revealed that creating 'ba' - a kind of dynamic special-temporal space where the reader induces the students into the narrative world of the picture book and engage them into interactive reading and invite them to be active readers of proficiency upon the good relationship built on mutual trust - is the most considerable technique to be an efficient and reliable reader of picture books in English classes at elementary schools in Japan.

キーワード：絵本読み聞かせ、熟達者、「場」の生成、絵本読みあい

Keywords：reading picture books, proficient reader, creating 'ba', interactive reading

1. はじめに：問題点

「中学生を対象とした、絵本活用に関する基本的な考え方」(文部科学省 2016)によると、英語絵本の活用は第二言語習得理論に鑑みて望ましいインプットとなると考えられ、令和2年度4月の小学校外国語および小学校外国語活動(以降、小学校英語)本格実施に伴い、小学校3、4年生(中学年)用の副教材として各学校に配架されている。絵本の読み聞かせ方については「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」(文部科学省 2017)の「読み聞かせの留意点」によると「ジェスチャーを多用したり、(中略)絵本の英語を児童に理解しやすく別のことばで言い換えたりして」児童の理解を助けること、絵やあらすじについて児童に質問を投げかけることや、児童と「やり取り(インタラクション)」をすること、加えて「間を取る」ようにして児童が反応する猶予を与えること等に留意して、児童を絵本の世界に引き込むようにすること、また複数回読んで聞かせて、注目させたい点を示すことが挙げられている。これらは確かに小学校英語の絵本読み聞かせに欠かせない技術ではあるが、もちろんこれだけがあれば良い訳ではない。例えば間を取るとは、どの程度なのか、絵本の世界に引き込むとは、どのような状態で、どのような方法で引き込むのか等々、いざ教壇に立って絵本を読もうとするときには、すでに熟達した読み手でなければ理解し得ない記述が多い。結局、個々の読み手の熟達度によって、読みの技量に差が付き、そのことが、児童の絵本に対する集中度や内容理解に支障を来し、期待される均質化した教育的効果は得られない事態になりかねない。

また、小学校英語教育においては、英語活動および英語科の担い手とされる小学校教員が絵本の読み手となることが想定され、2019年度に始まる新しい教員養成課程においては小学校教員免許を取得するものが義務的に履修する外国語コアカリキュラムの一部に「児童文学(絵本、子供向けの歌や詩等)を理解すること」が到達目標としてあげられている。もちろん外国語コアカリキュラムが目指す児童文学の理解は、絵本を使った指導の大前提とすべき知識であり、これ失くしては真の読み聞かせにはなり得ない。いわば絶対必要条件であるが、さりとて、十分条件ではなく、読み聞かせの技術に直結するものではない。児童文学と冠する絵本やそこに展開される物語世界についての解釈(知識)と、その解釈を体現し表出する技術とは、別物なのである。絵本についての

知識は、それを体現する技術の必要条件であるが十分条件ではない。その結果、教員になってから、自ら意図的に訓練を積むか、熟達化するのを待つことになってしまう。

しかし、1986年の臨教審から24年を経て、諸外国に10余年の後れを取りながら¹⁾実施に至った小学校英語教育では、英語教育については教員の熟達化を待つ余裕など無い。何より熟達化していない教員によって読み聞かせを受けた児童が失した学習機会は、取り戻すことはできないのである。教員養成課程において外国語教育に携わる者として、早々に熟達した読み手の熟達とは何か明らかにし、教員養成に反映することが責務であると考え、本研究に至った。

これまでの絵本の読み聞かせについての研究は、その多くが未就学児童を対象とした母子間の読み聞かせや、幼児教育機関における集団読み聞かせを対象に行われ、小学校での読み聞かせを対象にした研究は、数多くなく(佐藤・西山 2007, 萬谷 2009, 吉村・吉田・今井・福島 2017, など)まだその端緒に就いたばかりのように見受けられる。従って未就学児を対象とした研究も射程にいれて、いくつかの先行研究を採用した。(中楯・山内 2016, 斎藤他 2016)

本研究の目的は、大きく3つの段階に分かれている：まず①熟達した読み手の技術を分析し、有能な読み手が持つ読み聞かせの技術を炙り出し、文章化すること。②次に①で文章化された技術を小学校教員養成課程の教師教育に応用して、経験年数に拠らない有能な読み手を育成すること。③最後に、小学校英語教育において絵本の読み聞かせが、児童の学びにどのように貢献し、教育的効果を生み出したのか検証することである。本稿は、これら3つの目的のうち、①及び②を射程に入れ、記述した。

本稿の構成は次の通りである：第2章では、本稿が前提とする「読みあい」および「場」の概念について説明する。第3章では、実験の概要を説明する。第4章では、その実験の一つを基に行った、熟達者へのインタビューから、熟達者の技術を明文化し、本稿筆者によってカテゴライズしたものを提示する。第5章では、第4章の記述を基に、大学生の授業ビデオを観察検討し、読み聞かせの「場」の構築の成否が、児童の集中力と学習動機を保つ授業となるかどうか、つまり授業の成否に関わることを述べる。

2. 本研究が前提とする絵本の読みあいの「場」

2.1 インプット・インタラクション仮説と絵本

ところで、文部科学省が先の『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』（文部科学省 2017）で述べた「読み聞かせの留意点」における「やり取り（インタラクション）」²⁾とは、おそらく今回の小学校英語教科化、および低学年化の依拠理論の中核にもなったであろう Michael Long (1996 他) のインタラクション仮説である。Long が主張したインタラクション仮説とは、ことばを通して人と人が意思を通わせようとする対話者間の相互交流 (interaction) が行われ、そこに第二言語を学ぼうとする学習者の注意が注がれるときに、第二言語習得が促進されるという仮説である。

そこでは、指導者が一方的な指導を行うのではない：すなわち、児童が単に質問されたことに答えるのではなく自発的に発話をするように、指導者が仕向けて、相互に意思を通わせようとする状況を作り出すことが求められる。このインタラクション仮説がこれまでの仮説と大きく異なる特徴は、言語が習得されるべき到達目標でありながら、同時に相互交流、つまりコミュニケーションの手段であることである。ここでは、目標言語が完璧に習得される前から使用されることが求められ、学習者は習得中の目標言語について持ち合わせている言語知識を使用しながら、他者と相互交流を図ることになる。指導者に求められる役割は、学習者間、もしくは学習者と指導者との相互交流において、使用される言語が何らかの誤りを含んでいないか観察し、指導者が相互交流に支障を来さない様に学習者の誤りを修正することである。学習者も、自身のアウトプットをモニタリングして、徐々に誤りを修正していければよい。問題は、この相互交流において、指導者に、学習者の誤りを、その場で相互交渉を止めることなく修正する外国語能力が求められることである。かなりの外国語運用能力が必要になることは、容易く理解されるであろう。

さらに、インタラクション仮説でも、インプットの適切性が鍵になり、Stephen Krashen が 1970 年代の著作において主張したように、インプット条件を満たすことが求められる。インプット条件は、Krashen の $i+1$ に加えて様々な研究者が提案しているが、本稿では村野井 (2006) から、関連性、真正性、音と文字のバランスを、インプット条件として追加したい。

適正なインプット + 対話者間の相互交渉

↓

学習者の注意

理解可能性：少しの手助けで意味が理解できる

(Krashen)

関連性：児童の興味にあっている

真正性：本物の英語

音と文字のバランス：適正バランスで両方存在
(村野井 2006) より抜粋

これらの条件がそろった時第二言語習得が促進される

従ってこれらの条件を充足する使用教材、指導法を検討すればよいのだが、小学校 3, 4, 5 年生は週 1 時間の授業、小学校 6 年生においては週 2 回の授業に、これらのインプット条件を考えつつ、教材を準備するのは難しい。また、母語獲得にそこで、真正性を充たし、子どもたちの能力や興味に合わせ選択できる、音と文字のバランスも良い絵本を選ぶのが良いと考える。文部科学省が配架した絵本を副教材として配架したのも、そうした理由であろう。

2.2 「読み聞かせ」と「読みあい」について

こうして小学校英語に副教材として絵本が取り入れられることになったが、教材が絵本であっても、先のインタラクション理論に依拠することは変わらない。読んで聞かせるだけの一方通行ではなく、相互交渉となるべく児童の自発的な反応を引き出すように読むことが、読み手としての教師の役割である。言語情報でも非言語情報でも、双方向に行き来してこそ、インタラクション (相互交渉) が成立するのである。双方向のコミュニケーションという意味で、本稿では以降、インタラクションという用語を用いていく。

英語絵本を読み聞かせる活動を、このインタラクションの形態に合わせて考えると、英語絵本を読む行為は、読み手にとっては出力情報 (以降アウトプット) であり、聞き手にとっては入力情報 (以降インプット) とする。そして、この聞き手が示す何らかの反応 (表情、感情の表出、笑いなどの声や発話など) は、聞き手のアウトプットであり、同時に読み手にとってはインプットとなる。こうして絵本という物を媒介にして、インタラクション

が成立する。

狭義の絵本の読み聞かせとは、絵本という表現形態に込められたメッセージを聞き手に疎通させようとするこのみを指し、読みあいとは、絵本を読み聞かせるという一方向の作用ではなく、聞き手に何らかのメッセージを伝えようとし、何らかの形で伝わった証としての、聞き手の自発的な反応を聞き手からのメッセージをして受け止めつつ、この聞き手の反応によって、意識的、無意識的に、読み方をかえてゆく。また、さらに呼応する聞き手の反応は、そのメッセージから受けた心象の表現であり、それが読み手に伝わり、さらに読みが変化してゆく。こうして、絵本の読みを通じて、メッセージが往還し、相乗的に読みが変化して、読み手と聞き手が作り上げる絵本の読みあいの「場」とも言えるものが出来上がっていくと考えられる。

こうした、読み手と聞き手の双方が参画して絵本の読みが作られていく状態を「場」が生成されていると仮定して、この「場」を伴う、双方向のやり取りがなされる絵本読みを「読みあい」と称することにした。小学校英語において、英語絵本の読みが教育的効果を上げるためには、この読みあいに至ること、同時発生的に場が形成されることが肝要であると措定する。

聞き手に聞かせる行為を読み聞かせと総称することが多いが、その内実は様々な下位分類があり、しかも研究分野や個々の研究者によっても定義や分類が異なる。本稿では、このインタラクションの基本的な形態である、読み手と聞き手の言語・非言語情報のやり取りを意識した絵本の読み方として、以降（絵本の）読みあいという表現を使う。なお、絵本の読み全般を指す上位概念としては、混乱を避けるため、絵本の読みという表現を使う。

この読みあいの概念は、幼児を対象とする絵本の読みの研究において既に用いられ、『絵本の読みあいからみえてくるもの』村中（2005）の中で、村中は絵本をコミュニケーションのツールとして、絵本を媒介としたコミュニケーションを図ることによって、読み手と聞き手も双方にどのような変化が現れるのか、述べている。逆に言えばこうした変化を起こすのが絵本の読みあいということになり、読みあいは、絵本を通じた関係づくりとしている。

また、保護者と幼児の絵本の読みあいについて、片桐・長谷川・福本・石川（2020）は「子どもの意を汲み取るような関りを通して、絵本を読む「共有型」の態度で絵本を読むと、（中略）子どもの発達をも促す」ことが示

唆されると紹介している。しかし集団においては「絵本と保育者—幼児との関係では、コミュニケーションツールとしての読み方ではなく、まさに「読み」「聞かせ」の読み方になる。」と述べている。

前述の村中李衣氏は、病児保育、終末期医療、矯正教育などの現場で絵本の読みあいを行い、絵本を読みあうことによって関係性を構築することをその実践や講演を通じて、提唱してきたが、対象は個人、もしくは小集団が多いと思われる。

読みあいについての様々な研究を参考にしつつ、本研究が目指す、1人または少人数の読み手が、比較的多い人数の聞き手と絵本を読みあい、場を構築していく、その在り方について考えていきたい。

2.3 絵本の読みあいの「場」

そこで、読みあいにおいて、双方向にメッセージが往還する「場」とも言うべきものが生成されていることが鍵となってくる。この「場」について、河野（2010）は「（物理的な場所を指さない）〈場〉とは、（中略）ある要因により区切られた特定の時空間を表すものとして捉えられ得る（中略）、個人の中に存在しながら他者とも共有される、選択的に知覚された時空間の表象である。」と説明し、また「しばしばこれらの〈場〉は、目的、必然的な成り行きといったある方向性を持っており、他者と共有されることが成立の前提とされる。」とも述べている。

これを踏まえて、特に本研究が目指す小学校英語における英語絵本読みあいにおける「場」とは、読み手と聞き手が一つのものを求める対象として共有する、つまり同じ絵本の物語世界や文や絵を含めた全体を読みあい、そこに生じる、情動や主観的な考えをも共有する、間主観的な、やり取りもしくは共有の場と考える。そして先に示した絵本を通じて共有する間主観的やり取りは、母子の読み聞かせにおいては、すでにいくつかの研究がなされている。片桐他（2020）は、絵本の読みあいに加え、使用した絵本の題材や人物をとりだして遊びに発展させる、読みあい遊びが、幼児の絵本に対する発話を質量ともに変化させ、ひいては読み手と聞き手の関係性を変質させると述べている。

中楯茉莉実、山内淳子（2016）では、熟達した保育者と、保育者志望の学生の読みを比較し、保育者がこれから絵本を読む導入では、①歌を歌う②絵本を読むことを

宣言する③表紙の絵に注目させる④静かに聞くように声掛けをする⑤作者名をいうなど、毎回決まった所作を持っていることを述べている。つまり、絵本の読みの時間、空間を一つの場面ととらえ、その場面への入り口と出口を明らかにしているというのである。また、横山・水野（2008）においても、保育者を観察し、「読み聞かせ前の導入」として手遊びや話をして、子どもの気持ちを絵本に向けさせていることを述べている。そして、集団への読み聞かせで得られるものを「保育者と子どもたちの安定した信頼関係の上に積み重ねられる共有体験（一体感）である」と述べている。

こうしてみると、熟達者は絵本を読んでいる最中のみならず、絵本の読みに入る前に、保育者が主導で幼児・児童を絵本に向き合わせ、また終わりの同様に保育者が区切りをつけ、次の活動につなげていることが分かる。

しかし、後に本稿の4.1でみるように熟達した読み手は、読みあいにおいて、この「場」を生じさせるために、歌を歌う、挨拶をするなどのルーティーンだけでなく、さらに細かく、具体的な手段を講じていることも分かった。

2.4 絵本の読み手の熟達化についての検討（斎藤他 2016）

ところで、絵本の読み、またその読み手や聞き手に、また両者の関係性に関わる研究は、幼児教育や発達心理学の分野では、特に長期的安定的な関係性を持つ母子や、保育者と幼児の関連などにおいて長年行われてきた。また Dialogic Reading の系譜を持つアメリカにおいては、1990年代から盛んに行われてきた（Whitehurst 2003 など）これらの研究のなかで、近年読み手の熟達度が、聞き手の理解に及ぼす影響や、読み手と聞き手の間の関係性の構築に果たす役割についての研究も進んでいる。（横山・秋田 2001 など多数）しかし、先に述べたように、これら先行研究の論考は、その年齢幅は新生児から未就学児童までが多く、また、その読みの形態は主に母子間の読み手と聞き手が1対1、もしくは保育園、幼稚園の比較的小集団を対象としたものが多い。本研究の最終目的は、小学校英語教育への還元であるから、これらをそのまま先行する知見とすることはできないが、斎藤他（2016）のうち読み手の熟達化過程における考察は、本稿の扱う読み手の熟達化の技術の解明に関わると思われるので紹介したい。

斎藤他（2016）では、「読み手と聞き手の間に日常的な関係性がなくても、洗練された読み手の技能によって、聞き手である子どもたちが絵本の世界に引き込まれることがある。」（傍線は本稿筆者による）その技能を獲得して「洗練された読み手」に至ると述べている。これは、先に述べたように、幼少期の絵本読みは、母子、恒常的に保育に関わる保育士や近親者など、既に信頼関係の構築された読み手によって行われることが多いことによる言及であるが、本稿には重要な知見である。

その上で斎藤他（2016）に拠れば、熟達化の過程の一つは「聞き手に対する実際の読み経験の積み重ねであると考えられる。」と述べられている。しかし、本稿が扱う大学生の実習の場合、初回の授業時から熟達化した指導を提供することが求められており、この斎藤他（2016）の述べる熟達化に、少ない実習経験数で到達させるかということを、考えていきたい。

さらに斎藤他（2016）は、「文字を読んで音声化するなどの下位技能が熟達しないと、聞き手の反応に着目する段階に行くことは難しい」、言い換えるならば、熟達者の読みの上位技術は、「聞き手の反応に着目する段階」であり、それは本稿が述べる絵本の読みの技術という下位技術の熟達の上に成り立つと考えられよう。

また、斎藤他（2016）は、自由記述回答とインタビューから、次のように紹介している：「読み聞かせをするときに気をつけていること／気をつけようと思っていること」は何かに対する探っている。自由記述で得た、「気をつける／気をつけようとしていること」を、①読みの速度、活舌などの「読みの技術」、②子どもと選書の相性や子どもの興味などの「聞き手への配慮」③絵本の持ち方や採光など「環境設定」④ただ読むのではなく表現するようにするなどの「イメージ・表現」の4つのカテゴリーに分け（丸数字は本稿筆者）、「洗練された読み手」と称した熟達者は②「読み手への配慮」が最も多く、初心者には①の「読みの技術」が最も多く回答されていると紹介している。つまり①の「読みの技術」のような「下位技能が熟達しないと聞き手の反応に着目する段階に行くことは難しい」と結論づけている。

本稿では、経験の浅い非熟達者と思われる学生も、下位技術である①絵本の物語の表現技術、②絵本を扱う手技は既に習得されている。しかし、斎藤他（2016）も述べている読み手と聞き手の関係構築については、先の①②のような、比較的聞き手の存在なしに練習のしやすい下位技術とは異なり、事前に習得することが容易ではな

い。しかしながら、経験による熟達化を待てる状況にはない。本稿は、いかに少ない経験時間で、熟達者の上位技術を獲得させるための、熟達者の上位技術の明文化を一つの目標としていることを再度述べておきたい。

3. 実験の方法

3.1 本研究の行う実験の目的

本研究の目的は、先に述べたように、①熟達化した読み手の技術を分析し、文章化すること。②文章化された技術を教師教育に活かし熟達した読み手である教員を輩出すること。③小学校英語教育における、絵本の読み聞かせを通じた児童の学びに資することであり、本稿はこれらの内①②に特化して述べるので、いわゆる「下位技能」は実験の対象から外す。前章の考察より、大学生が下位技能を備えた上で、熟達した読み手になるためには、4章の熟達者のインタビュー結果から分かる「読み手と聞き手の読みあいの場を構築し、ある意味コントロールできるかにかかっていると推定する。

3.2 参加者

プロの俳優であり、子どもへの読み聞かせを行っている読み手1名の、読み聞かせ会における映像記録、を熟達した読み手Aとして分析した。また絵本の読み聞かせの熟達化を目指した学生3組；絵本の読み聞かせにはほぼ熟達した学生B1, B2（大学4年 読み聞かせ実習歴2年）、読み聞かせ実習歴は浅いが何らかの要因で成功したと思われる読み聞かせの学生C1, C2（大学3年 読み聞かせ実習歴3か月）と読み聞かせ実習歴は浅く何らかの要因で一部聞き手児童の集中力が途切れ読み聞かせが成功しなかったと思われる学生D1, D2（大学3年 読み聞かせ実習歴3か月）を、熟達した読み手から検出した項目について分析した。

3.3 手続き

本研究では読み手Aが絵本を読み聞かせを行う様子を現場で観察し、併せて録画したビデオ記録を観察した。また読み手Aについては、さらにビデオ撮影を行った凡そ1か月後に、本人が読み手となったビデオを見ながら、読み聞かせの際に意識していること、あるいは無意

識のうちのに行っている動作や配慮などについて、本稿筆者を含む共同研究の構成員からの質問に答えてもらう形で、当時の内観を求めるインタビューを行い、音声記録を取った。学生の読み手については、いずれも本稿筆者が記録者として現場に同席しその場で観察、さらに後日動画記録を観て分析した。

3.4 本稿の扱う絵本を読み聞かせる技術の範囲

絵本の読みに関する読み手の技術については、特に幼児教育や幼児を対象とした発達心理学などの分野において、様々なものが研究対象として取り上げられているが、本稿ではそれ他の技術は次の3つに大きく分けられると考える。

①絵本の物語の表現技術：まず一つは、絵本に描かれている物語世界を表現する手法である。これは、絵本の物語世界や登場人物や背景などを解釈し、声や表情、身振り手振り歩き方などの演技で表現する、その表現技術である。

②絵本を扱う手技：二つ目は、絵本の物性に注目して、絵本を物理的に扱う技術である。すなわち、絵本の持ち手としての立ち位置、絵本の持つ高さや採光、児童に見やすく持つことも重要であるが時に傾けたり、隠したり、またページをめくる速度やめくり方も絵本の物語世界を表現する手法である。つまり、絵本の物語世界を表現する道具として絵本の扱い、絵本さばきとも言えよう。

③速やかに読み手と聞き手の良い関係を構築する技術：三つめは、絵本の聞き手との関係構築の技術であり、本稿が述べるところの、いわゆる「場」の構築の技術である。母子の読み聞かせ、また、保育園などの小集団では、既に読み手である大人と、聞き手である子どもたちの間に何らかの、安定した関係性が構築されており、初対面の聞き手との関係を構築する必要は生じないと思われるが、本稿の扱う小学校英語の授業の参画はつねに、この技術を必要とする。

4. 結果

4.1 熟達者Aへのインタビューの結果

絵本の読みあい、場の生成、という2つの概念を共有したのち、絵本の読み手Aに行ったインタビューを分析した結果、熟達した絵本の読み手が、この2つの概念

に関連して、意識的、無意識的に行っていることは、以下のとおりである。

《Ⅰ 読み手の空間認識と場》

①物理的な空間の現地調査を行う時、幅（広がり）奥行き（深さ）ともに天井高（高さ）を必ず確認する。

②これらの内、最も意識するのは、高さである。その理由は、幅と奥行きは読み手の射程内に、聞き手が収まるように座席や座らせ方で調整ができる。しかし高さは調整が効かず、読み手の人数のわりに天井が高すぎると、声が拡散してしまう恐れがある。

③声で傘をかけるように、場を意識している。従って、聞き手の上空を読み手が制している。場は高さを持った3次元の空間領域であることが分かる。

④座席の構成

本読み手の実験では前方は床座り、後方は椅子、その後ろには立ち席と階段状になっていた。

《Ⅱ 読み手の空間領域とコントロールの主体としての認識》

⑤読み手と聞き手の空間領域形成：読み手の中では、聞き手との境界線について明確な意識があり、読み手にも、その境界線を意識させるように何らかの行動をしている。例えば、物語の内容に合わせて、読み手が境界線と意識する目に見えない境界線の上を、聞き手にそれと分かるように、歩いたりする。

⑥互いの空間領域の線引き：読みあいの場を意識するときは、親密性は保ちながらも互いの空間領域を侵さないこと、互いの役割を認識していることは必要だと考える。

⑦服装：親しみを持ってもらえるようにしながら、観客に埋まってしまうように考える。当日はサロベット型のジーンズ

《Ⅲ 場の生成》

⑧つかみ：最初に聴衆の集中力、入り込みをどう掌握するのかに気をを使う。

⑨本番前に会場に入り、聞き手に声をかけながら、聞き手の把握と場づくりのイメージをしている。

⑩場の活性化：場づくりができた後も、停滞しないように、場を温める。

絵本で語られる物語には通常何らかの繰り返しパターンがあるが、繰り返しばかりでは飽きてしまうので、聴衆

が繰り返しに慣れた頃に、聴衆の期待を上手く裏切って、盛り上げる、いわゆる場を温めるようにしている。

⑪絵本の物語構造に必ず存在する、パターンと裏切りの効果を、演技でどのように増幅させるのか、（逆に、何がこの効果を減じることになってしまうのか）を意識している。

《聞き手の反応の把握と対応》

⑫読み手の反応をどう感じ取っているのか？：

まず反応を持った複数の読み手を「面」で捉えている

⑬外部からの雑音など何らかの外的原因により、読み手の集中が途切れた時などはこの「面」が崩れると認識する。

⑭聞き手の反応への対応：拾う反応も、拾わない反応もある。つまり、読み手として、ある程度読みあいの筋書きのようなものを考えていて、そのブーストになるようなものを拾う。逆に拾わないものもある。

4.2 読み手 A へのインタビュー結果から分かることと大学生の読みの成否

大学生は小学校の英語の授業、もしくは活動において英語の絵本を読んでいるので、これらによって既定されるものも多い。従って、上記熟達者の技の中でもこちらの意図に拘わらず変更ができないものもあるが、順にみていきたい。

《Ⅰ 読み手の空間認識と場》

①物理的な空間の現地調査を行う時、幅（広がり）奥行き（深さ）ともに天井高（高さ）を必ず確認する。

➡①'教室のサイズは縦横高さともに変更はできないが、そもそもどのくらいの大きさなのか把握しておくことは重要である。特に、教室の仕様がいつもと異なる場合、特別教室や体育館を使用する場合、学生は声が拡散して、子どもたちの集中力を保てないことを実感する。

しかし、ほぼ熟達した学生 C1C2 は、合同クラスの授業を音楽室で行った際、児童数の割には教室面積が広く、天井も高かったにもかかわらず、読みあいの場をつくることに成功した。どの空間にあっても、読みの主体である自分たちと、児童を囲うのにふさわしい空間を想定し、それに見合った、声の大きさ、動きをしているのではないだろうか？と考える。

②天井が高すぎると、声が拡散してしまう恐れがある。

➡①'に同じ

③声で傘をかけるように、場を意識している。従って、聞き手の上空を読み手が制している。場は高さを持った3次元の空間領域であることが分かる

➡③' 小学校の教室の場合、読み手が最も高さを持っているが、「傘をかけるように」という認識を持つかどうか、読み手の声や表情なども含めた様々なメッセージを届けられるかどうかの成否にかかる。

④座席の構成

本読み手の実験では前方は床座り、後方は椅子、その後ろは立ち席と階段状である。

➡④' 教室内の座席の配列を確認し、読みあいに都合が悪ければ変更することも必要である。

《Ⅱ 読み手の空間領域とコントロールの主体としての認識》

⑤読み手と聞き手の空間領域形成：読み手の中では、聞き手との境界線について明確な意識があり、読み手にも、その境界線を意識させるように何らかの行動をしている。

➡⑤' 空間領域の形成と把握は、大学生の授業の熟達度に関連が深いと思われる。

絵本読みに、ほぼ熟達した学生 C1C2 は、その読みの中で、複数回、聞き手の方に一歩踏み出し、ジェスチャーなどを行っていたが、その後読み手のホームポジションとも言える位置に必ず戻っていた。聞き手側に踏み込む回数やタイミングもうまく、それによって聴衆をコントロールしていたと思われる。初心者ながら成功した学生 D1D2 も、タイミングや回数の適切性では C1C2 には劣るが、この手法を駆使していた。一方で、読みの下位技術は高いのに、残念ながら聞き手のコントロールに成功しなかった学生 E1E2 は、子どもたちの内複数名が話の流れと無関係の発話をした際に、聞き手である児童側に一歩踏み込むことができず、逆に児童に気おされて一歩後ろに引いている。そこで、やや場の主導権を児童に取られてしまい、結果児童の集中力が切れ、それに伴い読み手側の集中力も切れてしまい、散漫な読みになってしまった。

⑥互いの空間領域の線引き読みあいの：場を意識するときは、親密性は保ちながらも互いの空間領域を侵さないこと、互いの役割を認識していることは必要だと考える。

➡⑥' ⑤' の事例からも、非常に重要であると考えられ

る。

⑦服装：親しみを持ってもらえるようにしながら、観客に埋まってしまうように考える。当日はサロペット型のジーンズ

➡⑦' 安全上の理由などから大学生には揃いの紺のポロシャツを着用させている。バーガンディーなどの他色を選ばない理由は、絵本を引き立たせるためであったが、一定の服装をさせることは、熟達者の発言からも重要であると分かった。

《Ⅲ 場の生成》

⑧つかみ：最初に聴衆の集中力、入り込みをどう掌握するのかに気を使う。

⑨本番前に会場に入り、聞き手に声をかけながら、聞き手の把握と場づくりのイメージをしている。

⑩場の活性化：場づくりができた後も、停滞しないように、場を温める。

絵本で語られる物語には通常何らかの繰り返しパターンがあるが、繰り返しばかりでは飽きてしまうので、聴衆が繰り返しに慣れた頃に、聴衆の期待を上手く裏切って、盛り上げる、いわゆる場を温めるようにしている。

➡⑩' 場の活性化については、下位技能ではないが、学生は事前練習を重ねる。しかし、成功させるためには、当日の児童の様子を把握することが必須である。学生の内、成功した、C1C2、E1E2 には、児童の方を見て様子を把握する余裕があったものと思われる。

⑪絵本の物語構造に必ず存在する、パターンと裏切りの効果を、演技でどのように増幅させるのか、(逆に、何がこの効果を減じることになってしまうのか)を意識している。

➡⑪' と同様。

《聞き手の反応の把握と対応》

⑫聞き手の反応への対応：拾う反応も、拾わない反応もある。つまり、読み手として、ある程度読みあいの筋書きのようなものを考えていて、そのブーストになるようなものを拾う。逆に拾わないものもある。

➡⑫' 成功しなかった学生 E1E2 に関しては、児童の反応のうち、進行に関係ないものまで拾い過ぎたきらいがある。児童観察をし児童の反応を受け止めることと、児童の全ての反応に、必ずリアクションすることは同義ではない。

5. 今後の展望

5.1 読みの下位技術の追加精査

上記学生3組の読みについては、既に習得が済んでいるため下位技能の考察は行わなかったが、今後教職課程にて絵本の読みあいを指導する際、考慮したい下位技能は以下の通りである。

①読み手の行動分析の焦点

- ◎ ページの捲り方：どのように、どのタイミングで捲るのか
- ◎ 指さし行動：何に対して、どのように、どのタイミングで指さすのか
- ◎ 発話の仕方：音圧、音響特徴、速度

②聞き手の反応分析の焦点

- ◎ 理解度・・・聞き手の読み聞かせの内容に対する理解度を判断する材料
 - ・ 笑い (◎ smile = 笑顔 ◎ laugh = 笑い声)
 - ・ 発話 (内容, タイミング, 誰に向けた発話なのか)
- ◎ 集中度 (顔面の方向, 体幹の方向, 視線の交錯)

読みあいの効果を測るための、読み手と聞き手の分析の観点を、上記の通り定めることができた。これを定めることにより、熟達度の高い読み手の、どの部分を学べば良いのか、また、聞き手の理解度が進んでいるかどうか判断するためには、何を観れば良いのかが分かる。

5.2 絵本の言語の違いは読みの技術に影響を及ぼすのか

英語絵本と日本語絵本（同一絵本の原本と翻訳版）を教材として、読み手と聞き手が日本語絵本の集団読み聞かせについて、佐藤公治・西山希（2007）によると熟達した読み手が、繰り返し読みと、読みと読みの間（ま）の有効性に活用している。本研究では、英語絵本に関しても有効であることがわかったが、例えば間の長さや、タイミングなどは、日本語と英語では何らかの差異があるのか、差異があるとすればどのような違いなのか、明らかにしたい。最終的な目標としては、児童が英語絵本をどのように理解していくのか、表面的な意味理解から、深い学びに至る過程を、日本語絵本と対比しながら、発展的に研究したい。

謝辞

本稿は、玉川大学学術研究所より平成30年度助成をいただき、遂行された学部間共同研究『絵本の読み合いによる「場」の生成：小学校英語教育における絵本読み聞かせとその効果の見える化』についての研究成果の一部を報告するものです。ここに研究を助成くださいました玉川大学学術研究所に感謝申し上げるとともに、研究領域の垣根を超えこの共同研究に参加し、本稿で取り上げた実験観察を共にしてくださったこと、そして様々な有益なご意見を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。

注

- 1) 文部科学省（2014）「初等中等教育段階における外国語教育に関する資料」外国語能力の向上に関する検討会（2014年2月28日）
資料「諸外国における外国語教育の状況」によると、韓国が1997年より、中国（台湾を含む）が2001年に、いずれも小学校3年生から週2～3コマの英語を科目として実施している。
- 2) 文部科学省（2017）「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」理論編「1. 児童期のまなびの特徴」などから、おそらく今回の小学校英語教科化、および低学年化の依拠理論の中核であろうことがわかる。

参考文献

- 片桐正敏・長谷川茉莉・福本那奈・石川由美子（2020）「絵本の読みあい遊びが子どもの言動に及ぼす効果について―市内A幼稚園における予備的検討―」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第70巻 第2号、北海道教育大学
- 河野秀樹（2010）「〈場〉とはなにか―主要な理論と関連する概念についての学際的考察―」『目白大学 人文学研究』第6号、目白大学
- Long, Michael（1996）“The role of the linguistic environment in second language acquisition” In W. C. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition* (Vol. 2: Second language acquisition, pp. 413-468). New York: Academic
- 文部科学省（2017）「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm
（最終アクセス日 2020年9月30日）
- 文部科学省（2016）「中学年を対象とした、絵本活用に関する基本的な考え方」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/02/1370109_1_1.pdf
（最終アクセス日 2020年9月30日）
- 文部科学省（2014）「初等中等教育段階における外国語教育

- に関する資料」外国語能力の向上に関する検討会（2014年2月28日）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2014/02/28/1344661_02.pdf
 （最終アクセス日 2020年9月30日）
- 村中李衣（2005）『絵本のよみあいからみえてくるもの』ぶどう社
- 村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 斎藤有・石川由美子・水谷勉・佐藤鮎美・河野武志・小林久男（2016）「絵本の読み手の熟達化過程に関する検討—アンケート及びインタビュー調査より—」『国際幼児教育研究』第23号，国際幼児教育学会
- 中橋茉奈実・山内淳子（2016）「熟達した保育者の絵本の読み聞かせの特徴—保育者志望の学生の読み聞かせとの比較を通して—」『山梨学院短期大学研究紀要』第36号，山梨学院短期大学
- 斎藤有・内田伸子（2013）「幼児期の絵本の読み聞かせに母親の養育態度が与える影響—「共有型」と「強制型」の横断的比較—」『発達心理学研究』第24巻2号，発達心理学会
- 佐藤公治・西山希（2007）「絵本の集団読み聞かせにおける楽しさの共有過程の微視発生的分布」『北海道大学大学院教・育学研究紀要』第100号，北海道大学大学院
- Whitehurst, G. J. 2003 “Dialogic Reading: A shared picture book reading intervention for preschoolers” In Kleeck, Anne Stahl, Steven, Bauer, Eurydice (Eds.), *On Reading Books to Children: Parents and Teachers*, Lawrence Erlbaum
- 横山真紀子・秋田喜代美（2001）「保育における読み聞かせはどのように熟達するのか（2）経験者と初心者の比較」『人間文化論叢 4』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
- 横山真貴子・水野千具沙（2008）「保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義」『奈良教育大学教育学部附属教育研究実践総合センター研究紀要』第17巻
- 吉村美幸・吉田朋世・今井信義・福島安希子（2017）「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究—担任が無理なく取り組める手法を探る—」『福井県教育研究所紀要』第122号，福井県教育研究所
- 萬谷隆一（2009）「小学校英語活動での絵本読み聞かせにおける教師の相互交渉スキルに関する事例研究」『北海道教育大学紀要 教育科学編』第60号（1）